

必修科目における相互評価を中心とした コラボラティブ・ライティングの実践（その2）

——現代小説5作品を題材として——

出雲 俊江, 秦 光平

Practicing Collaborative Writing Centered on Mutual Evaluation in
Compulsory Courses for All Students (ver. 2)

——Using 5 contemporary novels as a teaching material——

IZUMO Toshie and HATA Kohei

要 旨

本稿は、必修科目におけるコラボラティブ・ライティング実践の二年目の実践報告である。「問い」「論拠」「結論」という構造を持つ論証型の論作文アカデミック・ライティングの学びを目的とした指導について、二年間の実践と提出論文の比較から考察を行うものである。

グループでの論証型の論文作成には「問い」の共有が必須である。十分な調査時間がとれない必修科目での実践においては、社会問題をテーマとすることは難しさがある。その中で、「問い」の共有をもたらすものとして、課題作品としての文学作品の有効性が明らかになった。また、社会問題をテーマとした文学作品では、指導者による、物語内容に添う「問い」の共有にむけた関わりによって、豊かな「論拠」を持つ論文作成が可能になることも示された。

キーワード：コラボラティブ・ライティング、アカデミック・ライティング、文章表現、必修科目、相互評価

0. はじめに

論文やレポートなど論理的な文章を書くために必要なアカデミック・ライティングのスキルは、大学において身につけるべき重要な基礎的スキルの一つである。その指導は、初年次教育科目の内容として、またサポートセンターでの取り組みとして¹など様々に行われている。

勤務校におけるアカデミック・ライティングの指導は、3年次必修科目「日本語文章表現法」において取り組んでいる。アカデミック・ライティングのスキル獲得を科目の主たる目的とし

て掲げ、グループで一つの論文の執筆を行うコラボラティブ・ライティング²を方法として実践を行っている。「問い」「論拠」「答え」という形式の論証型の論文作成を体験的に学ぶこと目指しての実践である。

コラボラティブ・ライティングによる実践の取り組みは、昨年度2022年度に引き続き2年目である。2022年度前期の実践についてはすでに報告を行っている³。2年目となる2023年度も、2022年度と同科目、同じ目的と方針で行った。

当該実践は、3年次必修科目「日本語文章表現法」において行った。勤務校では初年次科目として別に「日本語表現技法」があり、学生はメールの作法などの基礎的な文章マナーをそこですでに学んだ後の文章表現科目である。卒業論文が必修であり、3年生から卒論ゼミに所属したばかりであることから、論文制作の基礎知識の取得を目的とすることは、実際的な学習の動機となっていたと考える。

コラボラティブ・ライティングを方法として取り入れた理由は、グループという形態が、教室での学びを活かすものである点である。勤務校は小規模校であり、学生がグループ活動に慣れていることも、理由である。方針として学生自身による文章作成の取り組みを徹底することを目指し、評価も相互評価を中心とし、主体的な文章作成となる状況を確認することを目指した。

今年度2023年度前期の実践では、昨年度の成果と反省と課題に鑑み、新たな課題作品の採用と相互評価の充実を変更点として試みた。本稿はその実践の報告である。以下、昨年度の実践と今年度の実践を併せて振り返ることにより、アカデミック・ライティング指導におけるコラボラティブ・ライティングの効果的な導入について考察をしていきたい。

1. 実践概要

(1) 昨年度（2022年度）

昨年度（2022年度）は、51名を2分級にして2名の教員で担当した。全15回のうち11回をコラボラティブ・ライティングの実践にあて、5人ずつの5グループでそれぞれ論文を作成した。

課題作品は、金城一紀『映画篇』を選定した。友情や恋や進路の悩みと、社会問題を併せて描く現代小説で文学研究も社会学的研究も可能な作品である。全5章を、各グループで1章ずつ担当。目的としたアカデミック・ライティングの形式での論文作成としては、質にばらつきがあったものの、論証型の論文制作に関する知識の獲得と経験を成果としたい。内容的に学生らしい多様なアプローチが見られた点では、予想以上の成果であった。

主たる反省点としては、相互評価を謳いながら、それに当てる時間が十分取れなかったこと

がある。論文作成の時間がオーバーしたため、相互評価とそれを受けての修正のための時間が十分取れず、評価を活かした書き直しに落ちて取り組めなかった。何より、修正点を見出し、より良いものを求めて書き直しを行う中で、論理的構造への理解が進むことを考えると、評価の時間不足は大いに残念であった。また最終評価の共有も十分時間が取れず、達成感が味わいにくい終わり方になってしまった。

(2) 本年度（2023年度）

今年度の2023年度でも、同様にアカデミック・ライティングのスキルを身につけることを目的とし、昨年度の成果と課題を踏まえ、継続してコラボラティブ・ライティングの実践を行うこととした。テキストも、昨年度と同じ新田誠吾（2019）『これならできる！レポート・論文のまとめ方』⁴を採用した。昨年度との違いは、主には、課題作品を短編小説の5作品に変更した点、昨年の反省から相互評価の時間を2コマ分設けた点である。他に、インターネット検索だけの資料作成にならないよう、書籍からの情報収集を含めることを義務づけ、初めの頃の授業を図書館で行うなどしたことがある。取り組みの総時間数は昨年度と同じ11回となった。担当で毎回進度等の確認と調整を行ったが、具体的にはそれぞれの判断で行った点も昨年度と同様である。

以下は授業概要である。

1. 第2回（4/13） 5作品配布 第5回までに読んでおいてほしいことを伝える
2. 第5回（5/17） グループ分け 好きな作品で5名ずつ
3. 第6回（5/25） 論理的な文章の書き方 について説明
4. 第7回（6/1）～第9回（6/15） グループでの話し合い 「テーマ」「論文構成」など
5. 第10回（6/22） 「テーマ」と「問い」を決めて提出
6. 第11回（6/29）～第13回（7/13）
7. 第14回（7/20） 2グループで相互評価
8. 第15回（8/3） 相互評価を受けての修正版を全体で相互評価
9. 授業終了後 完成版提出

2. 課題作品の選定

今年度（2023年度）の課題図書には、5つの現代小説を選定した。本節では、作品の選定理由を述べたうえで、それぞれの作品内容を簡単に説明しておきたい。

今年度、実施した授業は、前年度に実施された「日本語文章表現法」の内容を基にしている。前年度の課題図書には金城一紀『映画篇』（2000年）が選定され、高い学習効果があったことが報告されている。同作の選定理由については、前年度授業の実践報告にて簡明に述べられている。

報告では、金城一紀『映画篇』が選ばれた理由について、「何より内容が面白く読みやすい」点や「扱う作品自体は短編なので読むことの量的な負担が軽減される」点のほか、「在日韓国人の置かれた状況、家族の問題、大企業の不正、暴力など、社会問題が扱われている」作品内容であった点が重要なこととして挙げられている。これは、「日本文化学科の卒業論文のテーマは文学を内容とするものばかりではない」事情に鑑み、「論文作成の練習である本取り組みに主体的に臨めるよう、文学研究論文作成だけでなく、できるだけ学生の興味に沿った様々なアプローチを可能にする作品が望ましい」とされたためである。

本年度実践においても、前年度授業の選定理由を踏襲し、学生が無理なく、かつ主体的に授業に取り組めるよう、次の3つの選定基準を設けた。

- ① 平易な文章で書かれていること
- ② 学生の問題関心に近いと思われる題材が扱われていること
- ③ 現代社会の諸問題が扱われていること

まず①の基準についてであるが、学生の学力、意欲には開きがあり、一作品を読み通すこと自体へのハードルが高い学生も存在する。日本文化学科の授業としては、あえて難解な作品を選定し、読解力を向上させるための取り組みも必要ではあろう。しかし、本授業の目的はあくまでもアカデミック・ライティングの方法を学ぶことであり、作品を読む段階で躓いてしまっただけでは、授業に参加すること自体が難しくなってしまう。この点で、本授業では、負担なく、かつ面白く読み進めることのできる作品が選ばれるのがよいと考えた。

学生の前向きな授業への取り組みを「読みやすさ」以外の部分からも促すために設けたのが②の基準である。後述するように、選定した5作品には「スポーツ」「アイドル」「BL」「ファッション」「中学校」など、学生が興味をもちやすいと思われる題材が扱われている。これらの作品を読み、学生がそれぞれの立場から興味関心を深めていけるようになることを期待した。

しかし、自分の興味に近いゆえ、作品への「共感」のみで終わってしまったら、実りある学習にはなりづらいだろう。論文執筆のための調査、ディスカッションの中で他者の意見に触れることにより、自分の素朴な感想を相対化し、深めていけることが望ましい。そのために重視したのが③の基準である。選定した5作品には、上記の題材とともに「部活動におけるジェン

ダーバイアス」「複雑な家族関係」「セクシュアリティを事由とする差別」「学校における理不尽な校則」といった社会問題が描き込まれている。こうした作品内容を理解するためには、文献を調査・収集することにより最低限の知識を得たうえで、グループ内で意見を擦り合わせる必要がある。②の選定基準と併せ、自分自身が興味をもった作品への理解を深めていくために、図書館での文献収集や、ディスカッションをはじめとしたグループ活動への意欲が自然と喚起されることを期待した。

以下、選定した作品と、その内容について、簡単に述べていく。

○須賀しのぶ「マネージャー」（『夏の祈りは』所収、新潮文庫、2017年8月）

…高校野球部における「女子マネージャー」の立場を描いている。男子部員、男子マネージャー、女子マネージャーの構成員の中でジェンダー的な不均衡（性別役割分業）が生じてしまう問題や、そのことによりマネージャー業務が「一段下のもの」と感じられてしまう問題、「人に頼ることは弱いこと」とする価値観が当の男子部員をも苦しめている問題などが扱われている。ジェンダー論（男性学）やケア論の観点からアプローチが可能であると思われる。

○辻村深月「サイリウム」（『家族シアター』所収、講談社文庫、2018年4月。初刊：2014年10月）

…アイドル文化、ファン文化について、「ドルオタ」である弟と「バンギャ」である姉の相克とともに描いている。アイドルの文化を単に「礼賛」するのみならず、ジェンダー的な不均衡や、公私の境が曖昧化することによる搾取の問題も扱われている。アイドル論のほかジェンダー論、家族論などを参考にしたアプローチが可能であると思われる。

○一穂ミチ「BL」（『うたかたモザイク』所収、講談社、2023年3月）

…サブカルチャーにおける「BL」というジャンルについて、SF設定とともに描かれている。中心人物たちの同性愛関係を肯定するための思考実験がSF設定を用いつつ論理的に重ねられていく作品であり、BLの研究書、概説書のほか、セクシュアル・マイノリティへの差別をはじめとしたセクシュアリティ研究や、あるいはBLの研究書・概説書を参照してのアプローチが可能であると思われる。

○中島京子「本校規定により」（『朝倉かすみリクエスト！スカートのアンソロジー』所収、光文社、2021年8月）

…女子高生の「制服の着崩し」について、数十年間にわたって「生徒指導担当」を務めた男

性教員の目線から描かれている。時代によるファッションの変遷とともに、そのファッションを規定しようとする校則を問題化している。教育におけるジェンダー研究のほか、近年、話題になっている「ブラック校則」の観点からもアプローチが可能であると思われる。

○津村記久子「イン・ザ・シティ」（『現代生活独習ノート』所収、2021年11月）

…中学校における友人関係を描いている。他の4作品に比べて明確な社会問題が扱われているわけではないが、作中人物の心情が丁寧に描かれており、作品内論理を意味づけていくアプローチにはもっとも適していると思われる。ただし、いじめや家庭環境、同性愛の問題が、中心的なテーマとしてではなく風景の一部のようにして出てきており、それらの問題を扱った研究からのアプローチも可能である。

3. 作成論文の構成

本実践の参考実践である渡邊（2017）実践では、論理的構成力が大きく伸びたとしている。渡邊実践では、「総合」「構成」「表現」の3つのカテゴリーにわけて評価を行っている。そのうち論理的構成の評価にあたる「総合」の評価項目「論旨の一貫性」と、「構成」の評価項目「主張を理由と根拠で論証している」が、受講前論文の1.3点から受講後9.9点に伸びたことがその理由である。

そこでまずコラボラティブ・ライティングによる実践が、目的通り、論理的構成での論作文作成の体験となっているかについて検証を行うこととした。

検証の方法として、課題作品ごとの論文の章構造から文章全体が「問い」「論拠」「問いの答え」という構成になっているかを確認することとした。テキストとして採用している新田誠吾『これならでできる！レポート・論文のまとめ方』は、その初めに、前提として、レポート・論文の二つの型として「報告型」と「論証型」を上げ、「論証型」の説明のためのテキストであることを明示している。ここでの論証型とは、「問題提起」「研究」「問題解決」に至る構造のものを指すとしている。今年度の授業でも、昨年同様、テキストを用いるなどして、取り組み前、執筆開始前など、何度か論理構造についての解説を行っている。

以下は提出された論文の章題を示したものである（2クラス展開のため、それぞれの作品につき2グループが担当）。これらがそれぞれ「問い」「論拠」「問いの答え」という構成になっているかを確認した。

①須賀しのぶ「マネージャー」

①—a 「マネージャー」

序論

第1章 男子校における価値観の形成

第2章 女学校におけるジェンダー教育

第3章 男女共学におけるジェンダー

第4章 教師の視点からのジェンダー

結論

①—b 「『マネージャー』においてなぜ北園高校は優勝できないのか」

序論

第一節 なぜ男女で仕事が分けられているのか

第二節 相馬が「オトメン」を否定するのはなぜか

第三節 女子マネージャーは野球部の一員なのか

結論

考察：ジェンダー論（男性学）やケア論の観点からアプローチが予想される作品である。

①—a では、ジェンダーについて、男子校、女学校、共学、教師という4つの観点から調べて比較を行った。それぞれによく調べて特徴を示しているが、論拠とは言えず、違いをまとめただけの内容となった。

①—b は内容に展開に添って、それぞれ問いを立て答えを出している。結論は目新しい内容とはいえないものの、緩やかにではあるが、問いと根拠、導かれる答えとしての論理的な構成になっている。

②辻村深月「サイリウム」

②—a 「正しいアイドルの押し方とは」

序論

第1章 アイドルに対する理想・偏見について

第2章 オタクに帯する偏見

第3章 アイドルとオタク 文学作品での描かれ方

第4章 オタクたちの実態と理想のアイドルオタク像

結論

②—b

序

第一節 なぜアイドルを題材にしたか

第二節 姉のブログを弟が見た理由

第三節 ストーリー上のサイリウムが持つ意味

第四節 姉弟の関係

結

考察：②—aは、アイドル好きの学生による取り組みで、それぞれよく調査が行われて内容が充実した面白い論文となった。ただし懸念されたとおり、アイドル文化の「礼賛」に近いものであることも否めない。またこの論文でも、各章ごとのテーマでそれぞれ調べた内容を述べたものになっており、全体のつながりは緩やかで、それぞれが問いの論拠とはいえない。これは②—bの論文も同様である。

③—穂ミチ「BL」

③—a「恋愛心理 —恋愛感情を抱くということについて—」

0. 序章

1. 恋愛感情とは 友愛感情との違い
2. 多様性と現状 —LGBTQ から—
3. 性犯罪の対象 —犯罪史理学からの考察—
4. 恋愛の必要性 —人はなぜ恋をするのか—
5. 結論

③—b「「胸が痛む」とはどういうことか」

序

第一節 作中で「胸が痛む」という話がどのように展開されているか

第二節 医学・生物学的目線で見ると「胸が痛む」とは

第三節 ニンヤシサクによる「胸が痛む」とはどういうことか

結

考察：この作品で予想された内容での展開となった。③—aは、恋愛と友情、LGBTQに関する問題、性犯罪、恋愛の必要性という観点から、それぞれのテーマで問いを提示し、調べた中

から答えを探して述べた。よく調べているが、問い、根拠、結論という展開はない。③—bでは、「胸が痛む」を観点に、それぞれの問いを解決し、課題作の解釈へと向かっている。「胸が痛む」を問いとして、各章の取り組みが結論への根拠となり、論理的な展開になっている。

④中島京子「本校規定により」

④—a「校則について考えたこと」

序論

第1章 日本の校則について

第2章 日本のブラック校則

第3章 世界の校則について

第4章 世界のおかしな校則

結論

④—b「制服に関する考察—『本校規定により』を軸として—」

はじめに

第一節 制服の在り方と移り変わり

第二節 生徒の制服への認識

第三節 現代の制服とジェンダー問題

結論

考察：④—aは、「ブラック校則」を主たる観点に、日本から世界に視野を広げ、各章の立場から主に具体例を紹介する内容となった。それぞれの内容は論拠と言えるものではない。

④—bも、制服について、それぞれに状況を分析する内容である。各章がゆるやかに関連しているが、問いと論拠という関係ではない。

⑤津村記久子「イン・ザ・シティ」

⑤—a

はじめに

前半

中間

後半

終わりに

⑤—b

対人的コミュニケーションについて
母親との関わりから見るキヨとアサ

考察：「イン・ザ・シティ」は、問題が分かりやすく提示されているわけではなく、いじめや家庭環境、同性愛の問題が、物語の中で風景の一部のようにして出てくる作品である。課題作の特性もあってか、どちらのグループも問題を取り上げるという形ではなく、物語内容に添って深く読み、その読みを示すという内容になっている。読み取り自体は妥当で、本文から根拠を示しており読み応えのある内容になったが、「問い」のないまま作品解釈に入っているため構成としては論理的とは言えないものであった。

このように見てくると、今年度の提出論文の特徴として浮かび上がるのは、「問い」「論拠」「問いの答え」という論証構造になっているものがほとんど無いことである。これは、昨年度の提出論文と比較するとより明らかである。参考として、昨年度の実践で作成された論文（aクラスのみ）の章構成を以下に示す。それぞれに問いがあり、完全形ではないものの、どれも「問い」があり、本論として「論拠」を述べようとしていることが見て取れる。

「母子家庭出身の子どもが思いつめないためにはどうすればいいか
—「太陽がいっぱい」龍一に着目して—

0. 序論

1. 犯罪, 非行を行ったこと
2. 「孤立無援の状態であったこと」
3. 「依存傾向であったこと」
4. 「コミュニティと母親からの愛情不足」
5. 「結論」

「河本・鳴海の心境の変化

～『ドラゴン怒りの鉄拳』（金城一紀『映画篇』所収）視線描写から考える～

0. はじめに

1. 第一場面の出会いの視線の描写
2. 第2場面の河本の鳴海に対する心理状態
3. 第3場面の河本の鳴海に対する心理状態

4. 第4場面の河本の感情の変化について
5. 第5場面の心理状態
6. おわりに

「恋のためらい／フランキーとジョニー もしくは トゥルー・ロマンス」論

0. 序論
1. 赤木と石岡の関係ー前半ー
2. 赤木と石岡の関係性ー後半ー
3. タイトルの映画と赤木・石岡との類似点
4. 二つの映画から見る物語の結末
5. 結論

「ペイルライダー研究 ―ペイルライダーとはなにかー」

序論

第一章 聖書について

第二章 小説 映画篇

第三章 映画ペイルライダーについて

第四章 その他の作品のペイルライダーについて

結論

「愛の泉 ～なぜ、こじらせてしまうのか～」

序章

1. 将来への期待感を持ちすぎて娘に異常に過保護になる母親と娘（リカ）の関係性
2. 家族から放置されている健と家族の関係
3. 引きこもり状態になってしまったかおるとその両親の関係
4. 祖母と孫（かおる）の関係性

結論

4. 論証型の論文作成をもたらす課題作品

今年度はそれぞれ異なる作者による5作品で、学生にとって身近なテーマを扱うものを課題作とした。学生は、自分の取り組みたい作品を選んでグループを形成し取り組んだ。もともと

興味のあるテーマということもあり、取り組みも比較的熱心で、提出論文もよく調査され、内容としては興味深いものが多く見られた。ただし、今年度提出された論文は、「問い」「論拠」「問題解決」という論証型の構造になっていないものがほとんどであり、昨年度との違いが明らかに表れた結果となった。

論理構造を成さない提出論文を見直してみると、具体的な「問い」が無いことに気づく。作品の提示するテーマを扱うものの、それらの「問い」は、問題状況全体を指すものでしかなく、論拠を示せる具体的な問いではない。例えば①—aの問いは「学校におけるジェンダーの形成」であり、他に②—aは「正しいアイドルの推し方」、③—a「恋愛感情を抱くというのはどういうことか」などがその例である。また④—a「さまざまな校則について」、④—b「制服について」は初めから状況説明を目指したものであり、答えを求める「問い」自体が存在していない。

では論理構造を成している提出論文2つをみてみよう。①—b『『マネージャー』においてなぜ北園高校は優勝できないのか』③—b「胸が痛む」とはどういうことか。がそれぞれの「問い」であり、その解決のための本論と答えとしての結論がある。この二つの提出論文は、「問い」が物語内容に添ったものだという共通点がある。

物語内容よりも、作品が扱う問題自体を中心とした場合、学生それぞれに知りたいことが優先し、グループで共有する「問い」を求めるに至らなかったと考えられる。翻って言えば、物語内容に添った「問い」を立てるよう指導することによって、論理的構成の論文作成体験が得られるとも言える。

改めて、コラボラティブ・ライティング指導、特に論理的構成を持つ論文制作指導のための課題作品について考える。

論理的構成を持つ論文をグループで作成する場合に必要なのは、当然のことだが、グループでの「問い」の共有である。「問い」の共有が起きやすいという点で文学作品を課題作品とすることには意味があるといえる。文学作品でなく、社会問題をテーマにする場合、「問い」の共有が起こるためには、調査やその結果をグループで共有することが前提となる。基礎知識が無い場合は11回程度の授業時数では難しいだろう。論理構成を成さなかったグループでは、社会問題をテーマにする場合と同様の問題が生じていることがわかる。

渡邊実践では、太宰治「人間失格」を課題作としていた。物語自体が生きることに関わる本質的な「問い」をはらむものであり、「問い」の共有が起りやすい点で、良い選択であったと言える。一方で、内面を主に扱う文学作品を課題作とすることは、特に少ない授業数の場合には、作品内に「論拠」を求めることになりやすく、論拠を求めて調べるという点では、内容の広がりや豊かさを求めることは難しさがある。

今年度実践の5作品はいずれも社会的テーマが前面に出された作品であった。多くのグルー

プでは、物語よりも課題作品のテーマ自体に目が向いた結果、グループでの「問い」の共有に至らなかった。ただし、物語に沿って「問い」を共有できたグループは、作品が提示する社会的テーマにも触れつつ、論理的構成での論文作成に至っている。その観点から見ると、昨年度の金城一紀『映画篇』は、図らずも物語の「問い」と社会問題とのバランスがとれた作品であったことがわかる。また、指導者の関わり方という観点で言えば、指導者は、グループで「問い」を共有することを強く求める関わり方が必要であり、物語内容に添った「問い」を立てる指導が有効である。bクラスではそれが為されていたといえる。

6. 結 論

グループで一つの論文を作成するコラボラティブ・ライティングを方法として、アカデミック・ライティング指導を2年連続で実施した。目的は、「問い」「論拠」「問いの答え」という論証型の形式による論文制作体験の獲得である。二年間の実践と、提出論文の比較から、まず論理的構造を持つ論文作成体験をもたらす課題については、グループで「問い」の共有をもたらす課題作品としての文学作品の有効性が明らかになった。また、社会問題をテーマとした文学作品では、社会問題をテーマとすることの難しさと共に、物語内容に添う「問い」を共有することにむけた指導者の関わりによって、豊かな「論拠」を持つ論文作成が可能になることが実証された。

注

- ¹ 太田裕子・佐渡島紗織（2013）「自立した書き手を育成するライティング・センターのチューター研修とチューターの意識—早稲田大学における実践事例とPAC分析—」『Waseda Global Forum』9, 237-277
- 渡寛法・中島宏治・佐渡島紗織（2016）「ライティング・センターの現状と課題—学生アンケートの自由記述分析から—」『大学教育学会誌』38(2), 77-88.
- ² 渡邊淳子「文章作成指導におけるコラボラティブ・ライティングの効果」『保健科学研究誌（14）』121-128, 2017
- ³ 出雲俊江・久村希望「必修科目における相互評価を中心としたコラボラティブ・ライティングの実践—金城一紀『映画編』を題材として—」2022 広島女学院大学人文学部紀要
- ⁴ 新田誠吾『これならできる！レポート・論文のまとめ方』（すばる舎 2019）